

平成 26 年度 第 37 回 校内放送指導者講座 報告

神奈川県立足柄高等学校

放送部顧問 藤本美智子

平成 26 年 12 月 26 日、27 日に行われた校内放送指導者講座に参加させて頂きました。昨年度も事務局の先生方のご厚意で同講座に参加させていただいた身でありながら、今年も参加の機会を与えていただけたことに心より感謝いたします。参加申し込みから当日に至るまで多くの先生方に本当にお世話になりました。今後、私自身が神奈川県の放送部の顧問として貢献していくと同時に、この報告が神奈川県の放送部・放送委員会の発展のために少しでも寄与できれば幸いです。

【会場】

千代田放送会館

【日時・スケジュール】

12 月 26 日（金）

10:00～10:30 受付

10:30～10:45 開講式

10:45～12:15 講座 1 「顧問交流」

昼食

13:00～14:00 講座 2 「実践報告：磐城高校の考え方」

14:15～17:00 講座 3 「アナウンス・朗読 審査講習」

12 月 27 日（土）

9:00～9:30 受付

9:30～10:00 諸連絡

10:10～15:50 講座 4 「番組技術と模擬審査」

15:50～16:00 閉講式 修了証交付

* 講座 2 「実践報告」は、福島県立磐城高等学校の中野淳之先生による番組制作（主にドキュメント）の指導法等の報告でした。

・講座内容

顧問歴等を参考に7～10人ほどで振り分けられた班で受講しました。

講座1では班ごとに「番組の素材の見つけ方」「アナウンス原稿の書き方や読みの指導法」「放送部指導解決法（日頃の活動や顧問の素質など）」などそれぞれのテーマに沿った話し合いをしました。講座3、4ではアナウンス・朗読や番組の模擬審査を行い、どのような観点で点数をつけたかを確認し合いました。（講座4は今年も『Rの法則』でお馴染みの桑山裕明チーフプロデューサーによる講義でした。）

講座1

予め答えたアンケート結果をもとにして分けられた班でのフリートークの時間。自己紹介を行った後、それぞれの班での話し合いに移りました。

ここでの話は、また機会がございましたら皆さんにお伝えしたいと考えています。

講座2

福島県立磐城高等学校の中野淳之先生による実践発表でした。磐城高等学校は、近年NHK杯のテレビドラマ部門、テレビドキュメント部門において何度も優勝を果たしている強豪校です。（2012年から4年連続で優勝をしています。）ここでは磐城高等学校の放送部を育ててきた中野先生の番組制作に対する考えや指導法を紹介します。

○生徒に取り組みやすい番組

取り組みやすさ順位	Nコンのエントリー数
1位 ラジオドラマ	758 作品
2位 テレビドキュメント	558 作品
3位 ラジオドキュメント	470 作品
4位 テレビドラマ	476 作品

※テレビドラマは出場作品の完成度の高さを見てもかなり数居が高い。初心者が挑戦するなら、県の上位4位までが全国大会に進めるドキュメントの方がよいだろう。

○ドキュメント制作とドラマ制作の相違点

→ドキュメントとドラマは全くの別物。制作に携わる生徒をそれぞれ分けて、1つを極めさせるのがよい。

- ・ドキュメント＝「今」を切り取る → チャンスは一度きり。撮り直さない工夫を。
 - ・ドラマ＝納得のいくまで造り込む → 何度でも撮り直す。
- （ただし、締め切りを意識させること。）

○磐城高校のテレビドキュメント制作極意

①ネタ探し

これが最も大事。素材は、高校生だから上手く撮れるというものを見つけるべき。
NHKの方が上手く作れるものは、扱わない。

②インタビュー

インタビューは情報だけを伝えるものではない。テレビならば、応じてくれる人の表情にまで気を遣うべき。

キーパーソンは、「本音を引き出せるインタビュアー」

③ナレーション

- ・ディレクター（＝監督）がやるのがベスト。読みが上手いかどうかよりも現場を知っていることの方が大切。
- ・ナレーションは極限まで削る。ナレーションで自分たちの都合の良い結末に誘導するのではなく、インタビューで進める方がいい。（多くの学校が1200字くらいのナレーションを読んでいるが、磐城高校は600字くらい。）

④構成

- ・8分のうち問題提起を1分程度で行い、起承転結の「起」はコンパクトにする。
- ・最初の30秒で引きつけておかないと、見てもらえない。

⑤テロップ

通常のテレビ番組は、料理を作りながら見るなどの「ながら見」をされてしまう。そのためテロップを多く使っている。しかし、大会では「ながら見」はないので、重要なポイントだけにテロップを使用する必要があるだろう。

⑥タイトル

一言で示せるものを目指そう。「～」などを使って副題をつけることは言いたいことが絞り切れていない証拠なので、避けるべき。

面白そうなタイトル例 「舞装」、「201」、「1. 44 m²」、「究極の登校」

※磐城高校のモットー 「 笑いは絶対である 」

○顧問の指導（提案）の極意

- ・ポイントを絞らせる。
- ・顧問は作品に入り込みすぎず、客観的に見てやる。
- ・生徒が決めたことは優先。
- ・活動の全体像を描く。（お金の使い方を決める。）
- ・番組に対する指摘を全て受け入れて八方美人にならず、良い所をつぶさないようにする。

講座 3

NHK杯全国大会の準決勝出場者のアナウンス・朗読を聞いて模擬審査を行い、NHK放送研修センターの今野正人エグゼクティブアナウンサーによる解説を聞きました。

ここでは審査に慣れることが主だったので今野アナウンサーのコメントで印象に残ったものだけを紹介します。なお、今野アナウンサーは声がよく出ていることを重視していたようでした。

アナウンス

- ・ある1人の人に焦点を当てて書くというのは、安直にやらない方がいい。
→人物を取り上げるなら単なる人物紹介ではなく、他の人がスポットを当てた人物をどのように見ているか等、別の視点を加えて書く工夫があってもいい。
- ・取り上げた人の人柄を伝える例示は、聞いている人が納得できるものにしよう。
- ・意味に基づいた切り方をしよう。話をする時のように自然に。

例×「今日は職員室のお母さん、/青木晴美さんのお話です」

○「今日は/職員室のお母さん、/青木晴美さんのお話です」

朗読

- ・字を読むのではなく、意味を伝えることを大切にしよう。
- ・いきなり声に出すのではなく、場面やそこに登場する人物の心情をじっくり考えてから声に出してみよう。
- ・初登場の人物名は、しっかり立てて読もう。
- ・場面の切り取り方には注意が必要。情報が伝わりやすいところを選ぶようにするべき。
→ちょうどよい長さの会話文が入っているから選ぶのではなく、意味のある会話文が出てくる場所を選ぶ。(地の文を補強するだけの会話文ではなく以下に示したような会話文の出てくる場所を選んでほしい。)

会話文の練習用朗読原稿

乃南アサ『行きつ戻りつ』「青年のお礼」

新潟の佐渡島が舞台の話。佐渡島の北の端には「賽ノ河原」という場所があり、そこには地蔵がたくさん並んでいる。その地蔵の中には、必ず幼い時に亡くした子どもの顔に似た地蔵があるという。そういった言い伝えのある「賽ノ河原」にやってきた主人公（「彼女」と「彼」、そして見ず知らずの青年のやり取りが展開されるのが、以下の場面である。

その時、彼がずっと振り返った。その顔を見て彼女は一瞬、青年が泣き出すのではないかと思った。彼は唇を噛みしめ、彼女から目を逸らすと、今度は無数の地蔵菩薩が並び、風車が回り続ける風景に目をやった。

「僕は——みんな一緒にいるのかと思った。」

「――皆？」

少年の面影が残る首筋の、喉仏が大きく上下するのが見えた。彼女は少しの間、躊躇った後、一体、誰が亡くなったのと聞いてみた。青年は深呼吸をした。

「親父と、おふくろと、あと妹と弟です。」

彼女は、思わず息を呑んだ。

「4人？あなた以外の家族、皆なの？」

講座 4

NHK杯全国大会の準決勝に残ったテレビ・ラジオドキュメント部門の作品を審査し、NHK制作局 青少年・教育番組部チーフプロデューサーの桑山裕明さんによる講評と番組作りでの注意点について話を聞きました。（桑山プロデューサーはNHKの人気番組「テストの花道」「Rの法則」などを作っている方です。）

番組作りにおいては以下の2点がポイントになり、チェックされます。

1. 情報の質……明日すぐにでも役に立つ情報、新しい視点の入ったもの。

- ・この質を高めるためには視聴者の視点が重要。
- ・「知りたい」＋「共感」の要素を含んだ内容が良い。

2. 情報の伝達……見せ方に工夫がなされているか。

- ・シーンごとの異なる演出になっているか。ワンパターンの持っていく方にはなっていないか。
- ・シーンのつながりは、「でも、じゃあ…」という接続詞で次が気になるようにする。
- ・仮に番組を途中から見始めても視聴者が内容を理解できるように工夫する。
- ・相手という存在を意識した情報の伝え方になっているのか。

以上を報告とさせていただきます。この2日間で学んだことを自校での指導に生かすと共に、神奈川県放送部全体にも還元ができたと思います。